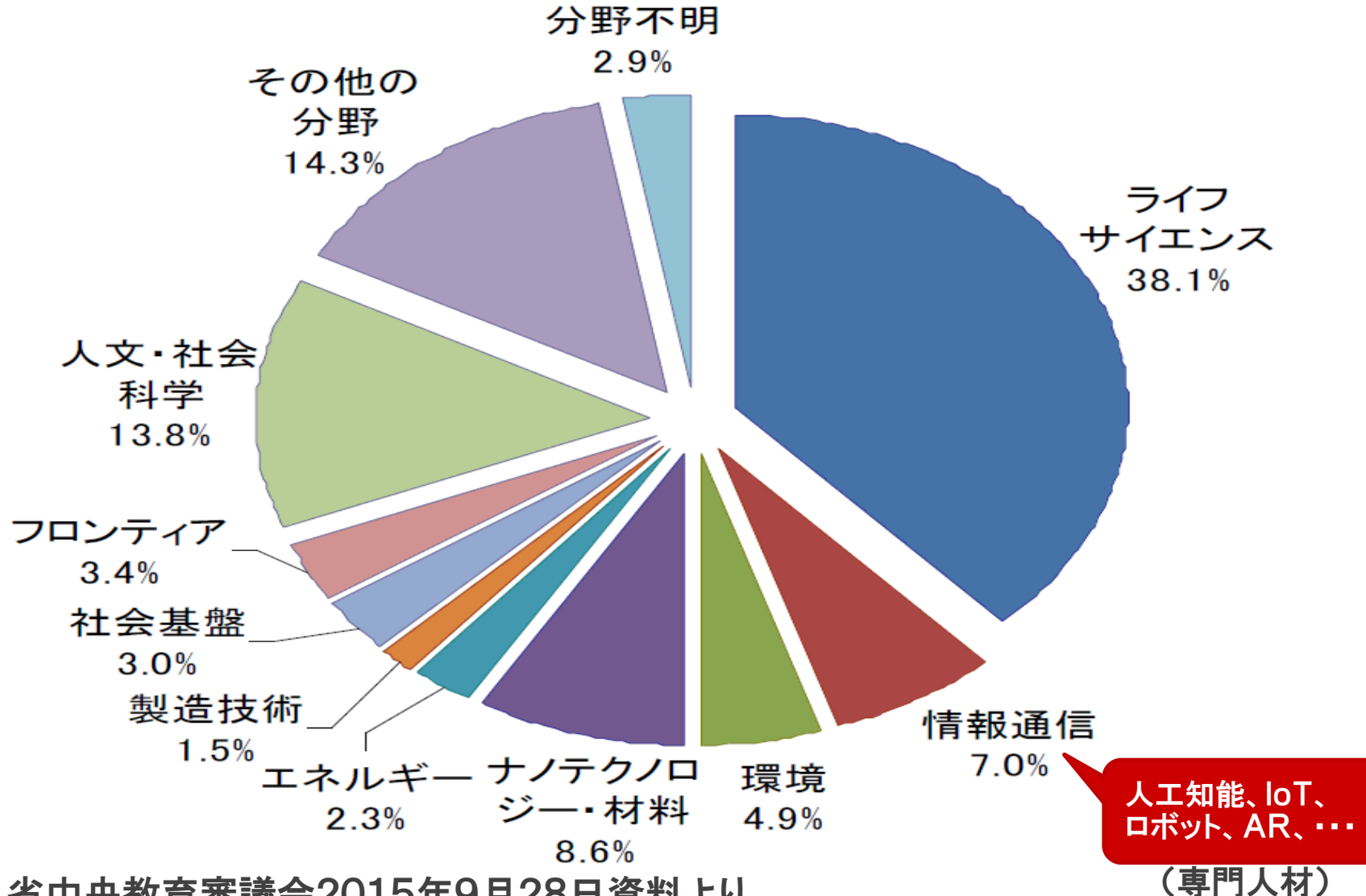


国際交流・協力にあたって考慮すべき主要な観点 A2～C2の項目過不足検証のために

目的	テーマ	相手国	KPI	省外連携
A 研究力の強化 (先進国)	日本の将来に 重要な科学技術か	左記分野で 世界最先端国か	国際共著論文 国際頭脳循環 博士数・博士レベル	内閣府
B 社会課題解決 (新興国)	日本の現在の 産業分野か	左記市場開拓/拡大 につながる国か	経済リターン 知財・国際標準化 人脈構築(官産学)	経産省 産業界
C 科学技術外交 (途上国)	相手国にとって 魅力ある技術か	日本の外交強化に 重要な国か	外交諸指標	外務省
共通	重要なリスクの検討がきちんとなされているか (環境・人権、非軍需、日本産業の現在／将来に大きな損失にならないこと)			

日本の博士減の抜本対策に向けて

1. 日本のポストクの専門分野（2008年度実績）



文科省中央教育審議会2015年9月28日資料より

(原典:ポストドクター等の雇用状況・博士課程在籍者への経済的支援状況調査 -2007年度・2008年度実績- (科学技術政策研究所2010年))

日本の博士減の抜本対策に向けて

2. 日本の産業の雇用

投影のみ

日本の博士減の抜本対策に向けて

3. 民間企業博士採用数の抜本増のための案

特別インタビュー

株式会社日立製作所技師長 武田 晴夫氏インタビュー ー俯瞰的視点から語る予測と企業戦略、SDGsの取組ー

聞き手：第1 調査研究グループ 上席研究官 小林 百合
第2 研究グループ 客員研究官 岸本 晃彦
上席フェロー 赤池 伸一

2030年の世界の持続可能な開発目標（Sustainable Developmental Goals: SDGs）が2015年9月に国連全加盟国一致で採択され、2016年1月より活動がスタートした。2017年5月には日本政府においても「持続可能な開発目標（SDGs）推進本部」が発足し、SDGsに沿った政策が展開されている。社会におけるSDGsの達成のためには、民間企業の積極的な参画が不可欠とされ、SDGsに則した企業戦略が模索されている。

今回、日本工学アカデミーにおけるSDGsプロジェクトリーダーを務める株式会社日立製作所研究開発グループ技師長武田晴夫氏に、SDGsと企業戦略、御専門の人工知能研究のSDGsにおける方向性、SDGs時代の基礎研究と人材育成の在り方等についてお話を伺った。

1. SDGsと企業戦略

ー SDGsの推進のためには政府だけでなく、民間企業が重要な役割を果たすことが期待されています。日本工学アカデミーのSDGsプロジェクトリーダーを務められましたお立場からお考えをお聞かせください。



武田 晴

しかし科学技術の研究を社会でSDGsに示される、というのを順番に追っに合わないと思います。に連携するSDGsプロジェクトに作ったと宣言させて特に産業界が学や官のに動くようになるにはSDや中期長期の企業価値を

ギーと、交通と、水と、廃棄物処理が4本柱であるとし、それらに共通の「社会インフラの科学」の構築に、国内外の諸大学の先生方と一緒に今も取り組んでいます。

3. 基礎研究と人材育成：幅広い視野と新たな活動への挑戦

ー 基礎研究のお話が出たところですが、武田技師長は日立基礎研究所の所長も務められておられます。基礎研究のマネジメントではどのような点が重要なのでしょうか。

一流の基礎研究者の深い研究の少なくとも本質部分を「俯瞰的に」理解できないとはじまらないと思います。私の場合はそれまでの専門であったAIというサイバー世界から、電子線や放射光計測、原子やスピントレベルのシミュレーション、新材料探索、バイオ、遺伝子、再生医療、脳科学などといったフィジカル世界に180度転向したことになります。ですが、ある1分野を長く続け、世界の一流の方々と密にお付き合いし、そのような方ともgive and takeできるようになったと考える自信が、全然違う分野でも頑張れば何とかなる、それが何とかなれば次も何とかなると次第に思えてきました。何より一流の専門家に囲まれ、そのような方々と毎日議論するのがとても楽しかった。これを楽しいと思う資質が基礎研究マネージャと

して最も重要ではないかと思います。大変でしたけど、有り難い人事でしたね。分野は違っても、同じ人間なのだからどこかで真理探究の共通の方法論のようなものがみえてきて、その相乗作用で、世の中がどんどん俯瞰できていくような感覚がありました。そのような俯瞰から前述の戦略論を帰納したと言えるかもしれません。

ー 日立グループでは、博士号の学位をもった集まりがあるとお聞きしております。企業の研究を支える人材育成についてお聞かせください。

博士の集まりというのは、「日立返仁会」ですね。もともとは創業者の一人で、初代CTOともいえ、その後50年以上にわたって日立の研究開発を指揮したといえる馬場桑夫博士の方針でできた集まりです。日立は日立の業務に関する専門技術を練磨する中で博士人材を自分で育てよう、という考えから、もともとは入社後に博士を取得した方々が集まり、更に後輩の博士を育てようという集まりだったようです。民間企業は大学での博士号取得者をもっと採用すべき、という意見もありますが、飽くまでその博士専門技術がその企業とどうマッチするかの議論がまずあるのがよいと思います。

ー 最後に、武田技師長の多彩な御趣味を披露いただき、仕事と趣味の両立についてコメントいただければ